

幼児期における音楽遊び“わらべうた”一考察

A Thought on Musical Plays and “*Warabeuta* (=Traditional Children’s Folk Songs)” in Early Childhood

千 勝 真知子
Machiko CHIKATSU

I. はじめに

我が国は、明治以降西洋文化の影響が強く、日本の伝統的な音楽文化が教育の中で生かされてこなかった歴史がある。今、日本の文化についてあらためて問われ、また音楽教育の中に伝統音楽が包括された。筆者は、幼児期の音楽教育・音楽遊びを考えると、日本の伝統文化（伝統音楽）である“わらべうた”を第一にあげたい。子どもの時に正しい音楽的教養の第一歩を踏み出すことの大切さを強調したコダーイの理念は、民族音楽を重視することにより、音楽教育のはじめは音楽の母語である“わらべうた”や“民謡”であると提唱している。そこで、子どもの声域に無理なく歌え、日本語のもつリズムやイントネーションが上手く表現され、遊びと結びついて生まれ、遊びを成立させるうえで欠かせない“わらべうた”の音楽教育上のメリットについて考察する。

II. コダーイの幼児音楽教育と理念

コダーイ・ゾルタン (Kodaly Zoltan) は、1882年ハンガリーの小都市ケチケメートで生まれた作曲家・音楽教育家である。彼は子どもたちのために、ハンガリーの民族音楽の法則に則って教育的作品を作曲した。それらは子どもに愛される国民的な作品である。コダーイは、ハンガリーの伝統文化（音楽）で子どもを育てることが願いであった。「音楽は万人のもの」「音楽ぬきに完全な人間はあり得ない」と、教育における音楽の役割を重視した。それは古代ギリシャにプラトンが教育の柱に「音楽」と「体育」を位置づけたことと同じである。コダーイは、誕生から就学までの重要な原則として、自民族の文化、民族の伝承から出発することを強調している。民族の伝承である“わらべうた”は、言葉の抑揚と音楽がもっとも完璧に一体をなしており、歌詞のリズム、強調、高まり等、旋律の作りを自然に素朴に整えている。そして子どもたちのためには、民謡の秩序と精神に従ってかかれた音域の狭い、リズムの簡単なうたが必要であり、子どもの年齢と成長途上にある声帯にもっとも適したうたは、半音なしの音域の狭いメロディーにより構成された“わらべうた”であると強調している。また、子どもの音楽的活動は「うたうことから始まる」「うたうことこそ基礎である」と、うたうことの重要性を指摘している。伝承文化である“わらべうた”は歌唱中心であり、うたいながら遊ぶものであり、集団の中で、グループの中で自分のうたをとおして遊びを拡げることができ、集団教育にとっても欠かすことができないものであるともいえる。そしてうたうことは、やがて就学時には始めるコーラス歌唱への準備でもあると断言している。また音楽教育をはじめる時期について、本当に音楽のわかる耳を育てるためには保育園からが望ましいとされていたが、さらに幼児期の音楽のあり方について考え、研究した結果、どのような音楽の影響を受けて育つかということが重大であり、「こどもの音楽教育は誕生前9ヶ月から」と結論を出し、芸術的体験が重要であることを述べている。そしてこどもの音楽教育に対する関心を持ち続け、保育園の音楽教育の重要性が次のように述べられている。

1. 音楽教育は、音楽的能力を育てるだけではなく、聴く能力、集中する能力をつけ、条件的反射、情緒性や身体にもよい影響を与え、こどもの多面的能力を育てるものである。
2. ハンガリー語を習うと同時にハンガリー音楽を学ぶようにすべきだ。これはかつてに作ったうたをうたわせるのではなく、こどもに合った音域と、その年令でよく理解出来る歌詩をもったわらべ歌を与えるということである。
3. 歌と動きは、誰もが知っているわらべ歌あそびを実際にやる中で結合されるべきである。
4. こどもが悪い音楽に染まらないように予防するのは、保育園のうちからやらなければいけない。大人になってからではもう手遅れである。

このようにコダーイは、こどもの音楽教育に大変熱心に取り組み、生きた音楽そのものにふれながら学んでいける方法として、伝承文化である“わらべうた”に着眼したのである。

Ⅲ. 乳幼児の音楽的発達の特徴とわらべうた遊び

乳幼児の成長の度合いを4つに区分し、さらに年齢別により音楽性（Musicality）の発達の特徴について考察し、年齢にふさわしいと思われるわらべうた遊びを表にした。これらのわらべうたは、本学学生が保育所実習（平成16年7月・平成17年1月）に臨んだ際に遊んだ曲であり、学生が準備した曲と保育所で実際に遊ばれていた曲の両方である。

乳幼児の成長の度合いを区分したリズム運動期

① 受動的リズム運動期（0歳～1歳）

外部から身体に与えるリズムカルな刺激に反応する時期でやさしい話し声・歌声・静かで明るい音楽が言語生活・音楽生活へのよきスタートになる。環境づくりの時代である。

② 発動的リズム運動期（1歳～2歳）

外部からのリズムカルな音楽の刺激に全身で反応する時期で、人声や音色を敏感に聞き分けるリズム感の芽生えの時期である。手を振る・歩く・うたう・打つことなどを喜ぶ時代である。

③ 模倣的リズム運動期（2歳～3歳）

外部の誘導に意欲的に応じる時期で、ことに2歳後半からの正しい導入が大切であり、音楽指導の準備時期である。

④ 実感的リズム運動期（3歳～6歳）

音感が急激に発達する時期であり、音楽を生活環境の中に遊びの形で、楽しく経験させなければならない。自発性を尊重し、豊富な音楽経験を習慣的なものにさせる音楽の基礎づくりの時期でもある。“心の健康”としての音楽の楽しさ・美しさを実感として身につけさせるたいせつな時代である。

		音楽性の発達の特徴	わらべうたの種類とあそびうた
①	0～6ヶ月	聴力は生後まもなく（24時間～36時間）活動をはじめ、いろいろの音を聞くだけでなく生まれつきリズムを内蔵している。	遊ばせ遊び ・いないいないばあ ・ちょちょちあわわ
	6ヶ月～1歳	音に対して積極的になり、音楽を聞いて身体を動かし喜ぶ、大人の声に合わせて発声する。周囲からのリズムカルな呼びかけや歌いかけ、リズムなどを聞いて手足を動かす。	子守歌 ・ねんねんころりや 季節のうた ・ほたるこい ・ゆきやこんこん
②	1歳～2歳	音楽を聞いて手を叩いたり、足をトントン動かしたりして、踊るような格好をする。またハミングをしたり、うたのひとふしを模倣したりして楽しむ。受動的音楽体験をさせ、気持ちよさを多く体験させる。	遊ばせ遊び ・だるまさん ・オデコサンマイテ ・ドッチンカッチン ・いまないたからす ・ももやももや
	2歳～3歳	音楽的な音に興味を示し始め、好きな曲を繰り返し聞きたがる。旋律的な音を聴く力が始まる。	しぐさ遊び ・メンメンタマグラ ・うまはトシトシ ・あがり目さがり目
④	3歳～	聴覚が急激に発達し、音の高さ、強さ、速さがわかり、うたう意欲が旺盛になる。友だちと協調的になりみんなと一緒に歌えるようになる。	手遊びうた ・お正月のもちつき ・お寺の和尚さんが ・いっちくたっちく ・ちゃちゃつぽちゃつぽ
	4歳～	活動的で運動機能が分化し、ごっこ遊び、集団ゲームなどに発展し、創造力が伸びる。うたう・聴く・身体の動き・楽器によるリズム表現を楽しむ。音楽的能力が豊かに芽生える。	鬼遊びうた ・かごめかごめ ・からすかずのこ ・ことろことろ ・七夕さん
	5歳～	身体的な発達が著しく、速さに反応が出来る、即興的な身体表現も上手になる。スキップ等音楽に合わせて身体がついていける。声域の拡大により、リズム・音程共に正確に歌えるようになり、表現が豊かになる。	なわとびうた ・大なみ小なみ 外遊びうた ・花いちもんめ ・ひらいたひらいた ・なべなべそこねけ ことば遊び ・おてぶしてぶし じゃんけん遊び ・たけのこめだした ・じゃんけんホイホイ

Ⅳ. わらべうたに関する意識調査

わらべうたに対して、どれくらい関心を持っているのだろうか、アンケートによる意識調査を行った。（この調査は本学2年生の保育心理演習 幼児期におけるわらべうたゼミによるものである）結果を報告する。

調査対象：10歳代～80歳代 103名

(10～20代 54人, 30～50代 30人, 60～80代 19人)

実施期間：平成16年6月～8月

1. 小さい頃、わらべうたで遊んだことがありますか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代	総計
あ る	46人 (85%)	29人 (97%)	18人 (95%)	93人 (90%)
な い	8人	1人	1人	10人 (10%)

「ある」と答えた方 どんなわらべうたを知っていますか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代
曲 数	31曲	37曲	35曲

特に多かったわらべうた

- ☐かごめかごめ
- ☐はないちもんめ
- ☐あんたがたどこさ
- ☐ずいずいずっころばし

誰から教えてもらいましたか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代
1 位	家 族	家 族	家 族
2 位	幼稚園の先生	友 達	友 達
3 位	保育士	先 生	学 校

2. 子どもたちがわらべうたで遊んでいるのを見たことがありますか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代	総計
あ る	32人 (59%)	17人 (57%)	8人 (42%)	57人 (55%)
な い	22人 (41%)	13人 (43%)	11人 (58%)	46人 (45%)

「ある」と答えた方 どんな場所で遊んでいましたか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代
1 位	学校	広場・公園	広場・公園
2 位	保育園・幼稚園の園庭	家の庭	保育園・幼稚園の園庭
3 位	家の庭	保育園・幼稚園の園庭 学校	家の庭

何人ぐらいで遊んでいましたか？

5～6人, 7～8人, 3～4人

3. わらべうたを子どもたちに伝えたいと思いますか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代	総 計
思う	47人 (87%)	28人 (93%)	19人 (100%)	94人 (91%)
思わない	7人	2人	0人	9人 (9%)

4. わらべうたをたくさん知りたいと思いますか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代	総 計
は い	43人 (80%)	25人 (83%)	18人 (95%)	86人 (83%)
いいえ	11人	5人	1人	17人 (17%)

5. わらべうたのよさは何だと思いますか？

	10代・20代	30代～50代	60代～80代	総 計
・協調性が身につく	36人	32人	12人	80人
・異年齢児と遊べる	37人	25人	14人	76人
・遊びが持続する	22人	10人	14人	46人
・身体的発達を促す	18人	14人	3人	35人
・音楽的な基礎が出来る	31人	11人	12人	54人
・その他の意見	12人	6人	0人	18人

その他の意見

- ・伝統的である
- ・わらべうたで友達ができる
- ・感性が豊かになる
- ・子どもらしい歌でよい
- ・基本的にアカペラなので、その時の雰囲気によって多少音程や節が変わり、表現力が身につくと思う
- ・昔ながらの音楽に遊びながら自然と親しむことができる
- ・異年齢と遊ぶことによって、いろいろなルール、上下関係等を身につけられる
- ・今の子どもはゲーム以外で遊ぶ子どもを見たことがないからわらべうたは良い
- ・お年寄りと一緒に遊べる、交流がもてる
- ・大人になった時、子どもの時をふと思い出すとほっとする時間がもてる
- ・高齢者が昔を思い出すきっかけとなる
- ・過去において聴いたことのあるメロディーを老いた人に耳にさせ活性化を促す

6. アンケートについての考察

大部分の人がわらべうたで遊んだ経験があるという結果であった。知っているわらべうたをあげてもらった結果、どの年代も30数曲であり歌い継がれていることが伺える。誰から教えてもらったかについては家族が一番にあげられ、温かい家庭環境であると思う。また年代が高い

ほうが友達、学校（先生）から教えてもらったとの回答が大部分を占めた。現代の子どもはテレビやゲームなどで遊ぶことが多く、外で遊ぶ機会が少ないのであろうと推測する。子どもにわらべうたを伝えたいと考えている人は、大変多く全体で91%である。特に年齢が高くなるにつれて多くなり、60～80代では100%であった。年齢を重ねるごとに幼い頃に体験したわらべうたの良さが思い出されるのではないだろうか。わらべうたをたくさん知りたいと思っている人は、83%でこの数値はわらべうたを知っていると遊びが広がり、子どもによい影響を与えることができるものと思っている現れではないだろうかと考える。わらべうたの良さについては、その他の意見としていろいろ出た。その結果わらべうたは子どもからお年寄りまで楽しむことができるものであることが明らかになった。

V. おわりに

コダーイの幼児音楽教育の理念を考察した結果、幼児期に育てなければならない心の教育に音楽があげられ、その中でも特に“わらべうた”から始めることが重要であることがアンケートの結果からも理解できた。コダーイは、歌うことが音楽の基礎であり子どもの音楽教育にうたうことを第一に考えているといっても過言ではない。特に“わらべうた”のように単線律をうたうことは、競うこと（大声を出したり、怒鳴ったり）なく、他と調和することができ聴覚の発達に繋がるのである。音楽は教会音楽グレゴリオ聖歌等、つまり歌うことが始まりである。日本の音楽（邦楽）もそうである。筆者は笙、箏を経験したことがあるが、これらの日本の楽器は「凡一乙乙」「チラロロタアルア」などと歌うことから始めるのである。微妙な抑揚など指導者の歌に合わせて歌えるようになって、はじめて楽器を吹くことができる。伝統文化である浄瑠璃も同じように口から口へと伝承されるのであり、日本古来の音楽は歌うことが中心であり、それはコダーイの音楽教育と類似点があるといえる。伝承文化である“わらべうたは”は、歌、動きが融合された音楽遊びである。そして“わらべうた”をたくさん歌って遊んだ子どもたちは、楽器にもスムーズに入れるともいわれている。歌うことは、曲に対する息づかい（フレーズ感）が養われ、動くことはリズム感を育てることに影響があると考えられる。歌うことが好きで、自然にメロディーを口ずさむ学生がピアノに向かうと、きれいに力みなく奏することができる。このことは筆者の指導経験からも窺えるのである。また“わらべうた”を言語的観点から考えると意味のない言葉がたくさんある。しかし、それを否定することはできない。なぜなら意味のない言葉は、子どもを空想の世界へ導いてくれるからである。そして何よりも“わらべうた”は、一人二人と遊びの輪に誘い込むことができる。仲間が増え遊びの輪が広がるのである。このような観点から“わらべうた”には音楽教育への導入、ことばの獲得、体の動き、仲間づくりなどのメリットが考えられる。今“群れ遊び”が子どもの心の発達に大切であるといわれている。核家族化し、兄弟が少なく、ややもするとゲームを相手に一人遊びが多くなっている。幼い頃から集団で遊ぶことによ

り、鬼になったり、追いかけられたり、捕まったり、さまざまな状況を体で感じることができ、それが心の発達に繋がっていくのではないだろうか。子どもの心の成長に良い音楽環境のなかで、音楽遊びである“わらべうた”が活用されることを願うものである。

参考・引用文献

フォライ・カタリン セーニ・エルジェート

コダーイ・システムとは何か P.48

全音楽譜

茂手木節子：はじめにわらべうたを

全音楽譜

池田 富造：幼児音楽教育法 P.14

ひかりのくに

飯田 秀一：表現の指導 音楽リズム

同文書院

大島 清・大熊 進子・岩井 正浩：わらべうたが子どもを救う

健康ジャーナル

近藤 信子：にほんのわらべうた

福音館書店